

WS1-4 PET-CT を用いた臨床病期 Ia 期非小細胞肺癌の縮小手術適応決定の試み

佐藤 幸夫¹・金井 義彦²・大谷 真一²・山本 真一²

長谷川 剛²・遠藤 俊輔²・塚田 博²・蘇原 泰則²

宇都宮社会保険病院 呼吸器外科¹；自治医科大学 呼吸器外科²

背景：近年、CT 検査の普及と共に、野口の A/B のような浸潤性のない、積極的縮小手術の適応と考えられる小型肺癌の頻度が増加している。しかし、術前 CT 及び術中迅速病理診断のみでは浸潤性の有無の判断は完全でない。我々は PET-CT を組み合わせ浸潤性のない小型肺癌の選択を試みた。方法：術前 PET を施行した臨床病期 Ia 期非小細胞肺癌 100 例(109 病変)を対象とした。FDG 投与 60 分後に早期像、120 分後に後期像を撮影し、各々腫瘍部 SUV の最大値を測定した。結果：AAH、野口 A/B (n=18)：3 例を除き SUV は後期で低下し、後期最大値は 2 例を除き 1 以下であった。0.77±0.34 (0.24~2.15) 最大径 2cm 以下の症例では 1 例を除き SUV は後期で低下し、後期最大値は全て 1 以下であった。0.57±0.19 (0.24~0.81)。野口 C (n=38) では SUV は後期で 22 例で上昇、16 例で低下した。後期最大値は 1.83±1.05 (0.46~4.33) であった。線維化巣の 5mm 以下の例 (n=17) で低い傾向があった<5mm; 1.23±0.90 (0.46~3.31)、>5mm (n=21)：2.30±0.93 (1.07~4.33)。野口 D/E/F (n=40) では 5 例を除き SUV が後期で上昇し、後期最大値はすべて 2.0 以上であった 5.61±2.78 (2.00~14.73)。扁平上皮癌では (n=13)、1 例を除き SUV が後期で上昇し、後期最大値はすべて 2.2 以上であった 8.82±5.38 (2.21~22.12)。結論：野口 A/B は後期で SUV が低下し、C 以上及び扁平上皮癌では上昇することが多く、後期値が良い判別の指標になると考える。PET は CT にて BAC が疑われる際に、浸潤の有無の判断に有用な情報を与え、最大径が 2cm 以下で後期最大値が 1 以下の症例では CT 所見及び術中迅速病理診断と組み合わせ、積極的縮小手術を選択することが可能と考えられる。